

## 『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする 国学の『古事記』解釈の研究』

プロジェクト責任者 遠藤 潤

本研究事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち、「神道・国学研究部門」の研究事業として、平成26年度単年度の期間で行われるものである。

同部門では、平成25年度まで3か年にわたって『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築』研究事業を実施し、国学に関する基礎的研究を進めるとともに、学内でさまざまに行われている国学研究の連携のための組織づくりを進めてきた。今回、平成26年度に実施する研究事業『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究』は、この活動の展開として計画されたものであり、同時に全学的な取り組みである『古事記』研究の一環として行われるものである。まず、後者について説明したい。

### 21世紀研究教育計画委員会研究事業『『古事記』の学際的・国際的研究』

本学では皇典講究所の創立以来、神道・日本文化の根幹に関わる古典についての研究が継続して行われてきた。『古事記』については、伝統的には国学の総合性のもと、河野省三、折口信夫、武田祐吉など文学や神道学をはじめとしてさまざまな分野からの研究がなされてきた。しかしながら、近年人文学の専門分化に伴って『古事記』研究も精緻化が進む一方で、分野を越えた研究の全体像はやや見えにくくなっているといえる。

そのような状況のもと、國學院では文部科

学省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」および文部科学省選定オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」において、國學院における古典研究の今日的な評価と再検討を進めてきた。

平成24年11月、國學院大學は「21世紀研究教育計画（第三次）」を発表したが、そのうち研究基盤整備に関する計画では「日本文化の国際的理解に向けた研究（国際日本学）の推進」が提起された。これにもとづき平成25年10月より21世紀研究教育計画委員会の定める研究事業として『『古事記』の学際的・国際的研究』（研究代表者 武田秀章・谷口雅博）が開始された。

この研究事業では、『古事記』を焦点とし、これまで國學院で展開してきた『古事記』など古典についての研究成果をふまえつつ、今日の研究状況に即した多方面からの研究を行う。展望としては、10年単位で構想される研究事業ではあるが、今回はその始動にあたる1年半の事業を計画する。この事業は、I『古事記』の本文校訂・訓読・現代語訳とII『古事記』解釈史・研究史の研究からなる。

Iについては、國學院の『古事記』・『日本書紀』研究の蓄積を基礎として、今日の諸研究を本文に即した解釈の視点から再検討しつつ、それらをふまえた新しい解釈と現代語訳を提示する。

IIについては、国学史、歴史学、民俗学、神話学、考古学の人文諸学の観点から『古事

記』の現代的理解についての検討を進める。國學院の歴史学ではすでにCOEにおいて〈東アジアのなかの古代日本〉という視点にもとづく研究が遂行されたが、ここでもこれに立脚しつつ『古事記』と古代日本社会の関係について考察する。また、文学・民俗学においても東アジアとの比較という視点を重視し、さらに、海外における『古事記』研究の歴史と現状を調査するとともに、海外の神話・説話との比較検討を行い、その基底にある文化の共通性と異質性を把握し、このことによって世界の中の『古事記』の位置や価値を考える。前近代において、『古事記』の研究・解釈を主として進めてきたのはいうまでもなく国学者たちであるが、国学による『古事記』解釈史については研究開発推進機構日本文化研究所「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」で進めるとともに、関係の研究者がこれと連携・協働する。具体的には、解釈史に関して時代別に区分した、(1) 近世前・中期（寛永版本～賀茂真淵）、(2) 近世後期（本居宣長～幕末期）、(3) 近代、またこれらとは別に、検討すべき分野として、(4) 神話学・民俗学・人類学、(5) 戦後歴史学における令制以前研究、あわせて5つの分野に細分化される。これらの研究を通して得た『古事記』研究の成果を論集にまとめて刊行し、世界に開かれた『古事記』学構築を目指す。これらのうち、日本文化研究所の神道・国学部門では、Ⅱの(1)から(3)について分担して研究事業として遂行する。

## 日本文化研究所「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究

この研究事業の担当者は下記の通りである：

遠藤潤（研究代表者、神道文化学部准教授、研究開発推進機構准教授〔兼任〕）  
松本久史（神道文化学部准教授、研究開発推進機構准教授〔兼任〕）  
塚田穂高（研究開発推進機構助教）  
早乙女牧人（研究開発推進機構PD研究員）  
武田幸也（研究開発推進機構PD研究員）  
齋藤公太（研究開発推進機構研究補助員）  
林淳（愛知学院大学教授、研究開発推進機構客員教授）  
一戸渉（慶応義塾大学准教授、研究開発推進機構共同研究員）

この研究事業を実行するにあたっては、これまでの研究事業で形作ってきた「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を基礎として研究活動を行う。同プラットフォームでは、Ⅰ 国学に関する基礎的研究、Ⅱ 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開、Ⅲ 国学に関する研究連携のための組織づくりを大きな3つの研究の柱としてきたが、今期の研究事業においても、この枠組にしたがって、『古事記』の解釈史の把握を目指す。以下、それぞれの柱にしたがって、研究の概要を示すこととする。

### Ⅰ 国学に関する基礎的研究

国学に関する基礎的研究として、ここでは『古事記』の解釈史の研究を行う。先に示したように、対象となる時代を三区区分し、(1) 近世前・中期（寛永版本～賀茂真淵）、(2) 近世後期（本居宣長～幕末期）、(3) 近代の各時期における『古事記』解釈について、どの

ような解釈・研究があったのか網羅的な調査を行い、文献リストを作成する。それとともに、主要な解釈・研究や校訂された本文については内容を検討して、その特徴を研究会での報告や論文として発表する。

## Ⅱ 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開

ここでは、日本文化研究所の研究活動の成果のうち、神道・国学に関する基礎データの整理・公開を行う。Ⅰにおける『古事記』の解釈史研究の成果のみならず、研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」(平成23～25年度)をはじめとする研究開発推進機構における神道・国学に関する基礎的データの整理およびデジタル・ミュージアム等における公開を視野に収めている。

なかでも右の研究事業で作成・整理した、平田篤胤の著書『靈能真柱』および『古史伝』等についてのデジタルデータは、『古事記』や『日本書紀』の解釈にも深く関わるものであり、今期の『古事記』の解釈史研究においても基礎的データとして活用範囲の広いものである。これらを研究に資する形に整えるとともに、デジタルの形態でウェブサイト上で公開することによって、より多くの人の利用の便宜を図る。

## Ⅲ 国学に関する研究連携のための組織づくり

先行する研究事業ですでに国学研究会の運営を行ってきたが、今回の研究事業では『古事記』に関しては、21世紀研究教育計画委員会研究事業全体における『古事記』解釈の検討会に参加するとともに、広く神道・国学を対象とし、これまで継続的に開催してきた国学研究会をひきつづき行い、学内外の研究者に参加を呼びかけ、神道・国学に関する情報の交換・共有を行い、「国学研究プラットフォーム」としての役割をさらに強化するよう努める。

以上が、研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」の背景ならびに事業内容の概略である。包括的な研究事業である21世紀研究教育計画委員会研究事業の進行にあわせて、今回の研究事業は単年度で実施される。「國學院大學 国学研究プラットフォーム」という拠点の充実を、具体的な研究対象に即して進めるというのが日本文化研究所神道・国学部門の役割であり、今期は『古事記』を対象として、多角的な研究ならびに研究交流の推進を図っていく。